深情
便り
言ぜ

女今川

一

へ13
2914
1

へ13
2914
1-3
へ13
2914
特
昭和九年
七月六日
購求

新見

叙言

幼少の時より同学糸竹どく深り
面おもてをうなまゝ。仮初もあだ
不善の戯をさとるかまされど
兒女をも〳〵の同学文章女小學女孝經
まんどうと潔なる

なりて女人今川と称する婦人今
川子像乃似るものゝ制羽る
なぞと婦女教訓とかゝる事。
うもゝ浜もゝ何人の似なる
事と詳よ世ぶんど古くらり
世に行れし兒女の弄と

弄るさわく販ゝ入方今世の
名称、うもゝ似りるゝけ
小説も亦何人は筆すゝ
れる変化ゝねど童蒙を母
屋人みて彼乃普ゝ行はる
今川にも海ゝ紙そゝ

なれば。ふる雨。そのあ紙
眉〳〵。深青。俤。婦女。今月と
題〳〵。紫式。をとぶき。湯ゆ式
口〳〵。とまと。一直〳〵。文屋り
ふふ。栗本。俳者平。這一長式
見〳〵。花の。切と。奪ハ。ばれと

とり見ハ。ゆゆ。ハ。例ハ
独刑亭が。一ニ。行ゑん。老婆ゑ
なんと。

千時文政九戌初夏

南仙笑楚満人題

柳暗花明
於花
茂次郎

あもぎ
お柳
曲水

暑ま
とゝ
ひろの
亀処
朱明
お松
おたけ

おろや
竹次郎
新之助

杜若

石室

深情艶婦女今川巻之一

江戸　南仙笑楚満人撰

第一回

古人有謂夫妻猶如天地之道の根本とまをなして始とする所なり詩に八関雎を冠し和哥に八雲ぐもの神詠をのりとしたまふとき夫婦大極両儀を生じ陰陽を生じ陰陽夫婦をなすなり男女の人倫本よりて喻へいうべし

三平二満ゑくも漆をもるべ人ゐのまどよりらずを
りの夏ゑ〜有が中よも男ハ女の美〜きよ縁の時ハ
妻をもそ外よ外を通ゑもゐ乃よもむくこハのめく。
男よ愉へ〜天よ〜て女ハ地よひとしく天〜ゐ面義
のあゐみをうけく草木化生ゐる乃理ゐ乃女ハ男
よあゐまてくハ捨らるくとも縁の乃をもるべりつハ
天の納受あ〜ぐるべき美よ國初の頃あ町家の
業屋よ綱絡屋けちうとの人ゐ後二人あり是を

桐七妹をゐ稲といのて二人ゐぐら外ぐ世きて〜く外て
妹ゐ稲ハ容貌ハのまよあらず。姿形ハ桜と海棠を
こゐるらべ〜ゐるべく。大家のゐ娘さゐよあてすいや〜
からぬ風俗父母のてうあいかぎりなく糸竹のみち
種汁の業ゐくらかからず。ぐそよ死娘ゐて幼ゐの
時〜ゐ出ゐの嫁よやらんと約束して當年ハ十六
ゐすゐる夏ゐ面系婚後の支度ゐく。けのハ呉服屋
小間物屋入うちりこちうちり。いろく〜ものべそ

中よりおぼとのゝ下て戈発者。お梅よりけこゆるつゝり。
上をきこへと大さう見父母の心やいろうらん。
支度も大方とのゝひけまゝ。吉日を撰み首尾こく
婚礼の日限も定り元服も余りすやうに西条の
こちへ引受て媒まるゞよりと麹町へ嫁こそ
娘のよろこんで両家よりとゞくすくらず是
より引うへ中の中よりお梅ハ涙ぬ新郎も外の者ハ知
らねども。お梅ハとりとけあんどらまゝ心づくひぞ妹

勝ゆまゝ。こゝ。ゞ。ゞ。ゞ

ちゃこ又ゑんのんご雑ぞよちやくらまこのご
ろの「だまふす ちやくらまハいてーませんが。私ハ
りつそ死んで ちまのとのござります 花「ナゼ 「ちあ
ちこハ隠く日まーる 柚さんとおむつまーく 茶
ちさまごく 私よハあいたぶつきまして 遅ちされます
めごうーまて 憂目をんろう。死ぬがよのござり
ます 「馬鹿ち 夏をいの。 梅ハ お親ぶ 約束こと
ろこ 何ち まこぶ好んで 笑ろこ 女房でちまー。そ

ちて本座の姫ごとやつく。お繁ハそのの氣ハ
ちめくぶ。何ごろ 本座ぶりをまるようで 後よまご一
夜もりつーちる 藤こ 夏ハねく。そまぐ 否ちまるあつ
ちら。内へ飯るごろう。てめくち氣のせめくんぶ。お繁
ぶさろきおまぶ 後くよろこそんちまいごろうぶ。
一ツ内ち 否まぶ。否でちくまくハ 侍くちよろうー。
一ツ所ち 飯ちくちまずハ ちるめくー。 翁へ 夜の ちのまへ
這入つく 藤こち。おまぶ ぶ ちるまさく ちねくけまぶ

ひじやうねくろ「そまこハ
一ッ所よりも窠拵ばーてす。
どふふふ
ほん婦ごゝのをきゝこゞ
ござりませんが。そうゆうこと
うゝり仏男の癖と恨と
をゝらべく泣くゐる。義次
郎もこまりゝ正く庵流を
明る者よ二人ハ外のゝる

まゞらゝて。そきゝゐふり
あゝく居る「のろ豆腐屋
どんぞ彩遣さゐゞゐ愛入ゝ
せらまきゝとゝござります
義「ヲイゝく今ゝ行ゝらまそく
行ゝゞのひトゝ引んことゝるを
ひきゝとゝめ「そんゝゝ媒酌
お願へ糸りますゝ義「アイト

いろ〳〵とまり出して行くと門ハ鎖してあの死よ御主人
ふるまをして。お繁の方へ出て行ぐ〳〵。女房の里へ
あやまるぐいやるどいのも。江戸屋敷のあの氣毋の
よぶのを幸ひよ座敷へ来て見まぐ毋ハお繁を
相手よして酒盛り西系「おつるさん私ハ今日ハ
酒氣ハごぎりません 母「そのいまずとつぐぐや
まて。お繁見ぬへさしるせへ「アイとハいへど初ろ
おくのぢ〳〵ているよ。毋おやハ何の意もつゝず

母「娘ハいろ〳〵まで〳〵そんるのまを為だろう〳〵く
居てハるのうら。早く見ぬへ出んるせへトのまを
て表ハ〳〵とし〳〵て涼く出ぬ。ひんとそれるる
鯛めんをそやく接へろこのひ身くきやト毋ハそら
さぐを。お繁ハ酒をふのく行「お毋さんモウ四
めんるうさりません。私ハ風を引ます〳〵とのでどぐのま
まるら酒をいやぐどぎります 母「そんるら今ま
おそふめんが出来るう〳〵えるさい。お繁〳〵と毋の

「ハイ」六りんどう三ぞくるる。そのうまにまどりお杉ハ
泣顔　「モウク」私ハくやくやくりくりません。
今日中ゑ本丁へ私ハうくりますよ　「杉や必く」
そんな事をいやるまゑ。渡世ごろら深むろと。いつの
取りうるとるら。ひ三まで何ッ云分ハあの外の死
よつのこ孤も。るの所のあくまで。皆是ちゑぶ
るす業と。ちくびいとど憎らくと。杉ゑが心引くて
「それハどこよりやるの　「どこまあるあの

人の爺ハいくませんあるこまおゑよくもわどぶ
あります。お花ゑ何の所ごでござります　「外の
夏でもるのゑ且ぶさんハお風をやくことふごろら
お母さんゑのお家をのぐくおろらせやせとおくやろ
たろら花よりひつけよふとやろく　「おそるるぐく
るけまびるりませんろ　「そのでハるのゑおぶが
よく働ゑを考ろく居るろら。おの花やくトよびま
て　「ハイ何ぐござります　「いの花やどのごの所

且那のお家をのぐく。いろものよふまておくまと
言分をく奥へ行。「お繁さんのよふるけつうゝる
人があるものゝ。此名のお娘さまでも。あんる那者
てんハれく。「おすぎどんあんまり味噌をあげるさん
る。けつとう人がおとりざまと。おそろしの物よ。「ハウ
ありそうなことサ。おそどんやゝ且那のお家のけべ
よのをちゝと教へてくおくまと。のつゝくまでもごろて
ちゝぬとりのも。本丁へ對してもぬうら。「おすぎ

どん何でとりのつと本丁くゝと耳よ本の字がつのく
居るよふぐ。「とんぐ変ぐ身よさりのこの
ん。「いくよどんな変でもいひる世。お里ぐきと泉よ
うけく。そんなよいぐゝと。且那よそのやうら。「い
くらでもお且那よりくけるせく。おまくハ若且那が
ぐとくらうが。払ハちろともとりくふるのくと
ちらくとそくしるる那ら若旦那ぐ。のけふぎうぐるあくら
物をつのるる変ぐ。ぐまくと。小說をのひるうらるあくら
お梅ハ散盃をさげるぐら。「「お且那さんをよくくて上
頼をおくくてつのくる

てゐる。私ハ何ものも不義者ぐらゐ出来ぬ。とさ
しうもいく口ごゝる「ハイく」と言ひながらも移
を尾目よりけく殺ぐいる見えとりの顔して煙草
きの分くゆると次郎ハ深く居なぐら。なるよ
煙管をのこせく呑んでゐる「爲や長を出ろと
きまろくくろやト。お柿ハ移よ彼を言ゆるよ
きでも。お柿ハ向こえ〜くせぢ家の子の扮る
月抄をとろく。ひよんで居る「お柿ハ本丁

へちろと泊のよあけばのひ「ハイありがとうこきり
ますぐ。本丁も此節家ぐ普請でござりますうら。
糸りまして世結よろりますうら。ア糸りまするま
トのの折ら本丁ろ兄桐七大病のよ〜つぼげ糸り
けまバ。おまげハそろく仕度とのく本丁へこ七ろく
つまね

第二回

形ておまげハ本丁へ急ぎ見えくるよ。桐七以の外

の大病をつくしてを養生まをしけま
ども。終に世を辭して迷途の露と消へ
うせしゝ。父母のうげきハいかも更なり日ごろら
仲睦兄弟うまじ。おまぎハとまも死きべきとも欲き
者を人さよりさめらまに一間の内へ入りて夜著を引
かぶり。行末越方の夏を案じいる。桐七ハ父母よりま
ぐも。おまぎを翻工へ返さぼ。孤を引づりこまとよと送
言よまうせ上ぐさとりぶ父此方つぐ物を迎へおまぎの

聟よせんとおぼ極るうち。此方つぐ妻ハ桐七を始
よ秘蔵しけまぶ力を落し。こまも孤るく又二人の
数よ入をけまぶ。家内ハ灯の消へごとく欲き悲
きむうよ此方つハいろ〳〵下女のお樋とりくるおよ
るまをめ。次の年。男子生るゝけまぶ。仆次郎と
名づけ。めでいろ〳〵こけるわどよ。おりやハ昔よ引人。
表向ハ下女うまぶ。内ハ沈でハ乃影遠氣ごりあてき
梅結の結裏よ上田の乃系黒髪子の芽をもえび

さげよ志めく おまげう新屋へまる あや「おまげさん
そんなよ為園所よ お出るさるを 九病氣が ゆます。
又大うと麹町の夏を 出ひ出てのるでござりま
あゆうよく考へく 九発ぢます。かうど町ハえろち
の出居家来 図前の男でおまへさんを女房まする
を不豆らしく帰まづ よして 代変相せさるぐお
ゆくまり拾ばして 跡とりがるの事 お前さるを 跡
取よあこいと。且那の お家。そま西名上方らお出る

きまて新き夜さるとり 美婦よして 跡をゆうとり
だと。ゆうもくまづ おつしやのまこと。已ゲ引
くらべて。いよ 新さく いとうくきく やへ所へ彼の新き夜
新き夜 おりやさん 何して おのでじやしへ
昨ハ 昨ハ 眼ばやさろい。お新るとあろうの あや 新き夜さん
てへ お出るまろく 上方のおまるるでも おげきんよ
あてお疲せうまろく くべきります。おまきさん お書

死でも言ひつけく糸りまーやうト蹴をしげ「樋や
そまハ私がそふいつくまのるよトづくとうてく行よ。
新くく女ハ答る波揚をきてうそまてさとふるんれまて
あつけよとらまてんそのる「新くく女さんへ江戸と
いの所ハあつる所であんる可愛らしの姫を嬉つく
返をとつる亦の大きる人があるますよ 彩「さて
ろのる何亦の殿郎らあらんが。アノお娘をきろふく
おーつけ女冥利よ尽るであらふ。ヨーが女房よるると

毎日く寝くだろうあるじゃテ 彩「あるこの四彩遊
きんよをるつのりでごぎいのますろら幸抱ーてあ者の
夏を人の世話よるらぬよふふようきこのまー。是す私
ぶ大きる骨を抜まーく 彩「モモそふうつこ夏ろうあ
まくをばこーが無きるのようふーてあくじゃく「ぶく
喧だろうり彩ナよるきるでとぎりまあゆう「分体
るの彩ナよあこら四彩があるでふ「ヒれ亦
とあるげさんハ何をーてあ生きるでふ。なるげそく

とゆぶ変よ。お杉ハ之知で「おかやさんへおきゝ
ハ五ハ持がおるのとおつゝやまて今五仏前で
お休をうまとうて此お栗を上るやうふとおつゝやの
もゝこと。栗をたべ。おひて行く「イヤよりの人
おやの。ゝ。ゝがとうもやへ下つくたや百日まうるが。
つのよ一日けの八何ともるのとのこと日がうのよう
おや。欲よるよ庶ゞやナ「アノ四子も変くの五不
幸よの力をお居ゝ。うさまとうんごろら。その是で

ござりますのさ「さてようのうアヨゝハ又麹町の
五番ものの夏を出ふく。ゝごらゝんものうと出ふこと
ト。必ゝて居る西ゝ見物のおくりとこの家よ。おまつりうつく
みるさて又うゝゞ町ふくハ此家お寿を内の話とうゞうの家うつり
人まゝとのふを幸ひようへもつのりふくハ大きよようとんこいる
四家前家弟ハ大きよかんゝやくふくおそよまて面うまゞつくく
きて「まゝ見物へ何所へいらつゝやり外へ毎日く
いる
お内でハいつそおとゞと斗ゝとうゝやのまて「母
まゝの内よだろりいらまるのの。そまゞとのて
餘りでござります「あんまりがんまりう用ゞ

あつてゞるのごとく前おまぶ是をとゝあつふとゝあん
まりあーぐふとゝのきつこと見ごゝきのこと見るあつまま
ひ捨ぢすると「うまくとゝいつてもうまれねくハ「今更
そんな変をあつーやるのハ。あまこて仮ごとけぐあり
ますすく「豆けもへちまも入ものへ「イモ入り
ます「いらねく「そんなら私をあん捨ぢす
のうへ「捨らまくとまてら是ようとゝ仮でまる
前のゝまある変ぐハ。ようくつもつてもえるぐいひる

前の根まぐまぐつく居るからぐ。お梅をおまぐ本
下へまつくハ。深のゝ間ぐありてのことぐハ。そまと焼
ぐりて共ぐくを追出ぢとおぢをゝとと焼ーぐりて
まくおまぐ房ようらふこゝのハ。まー一ぐ強の
とゝのものぐのまぐ前がお梅をバどのようも
きて取けくを孤のゝぐるけまバ。おまとゝ会ハ
アようらねくとゝつていろ。そまぐとゝつて仮もおまぐ
お梅ようぐ残つく今更まりあーみをらぐハらぐ

道理とのふものゝ。そのふのものごろうと[illegible]を引らけて[illegible]
[illegible]
[illegible]

さりぐよノウ。時よ義さんハまぐごろちく来るんぐ
うへ　鄰「イエ一昨日の侭で今和中村屋まで行を
やりまゝゝぐ返るもこぐどき　市山「一日や二日便りぐ
るのとのつくそイなる業ぐざとすのひ喜ぐ行ゑ。
やっぱりなる変る抜目がるのうら余程豆よやらうき
行くとそこら中を喰ひちゝうすうら世ろハ生業や
せんぜ　市山「むぐる道中をちやうちやくゝ豆ぐ生まるの
くらひちらうすのと。今よ義さんが来るさうぐらう。

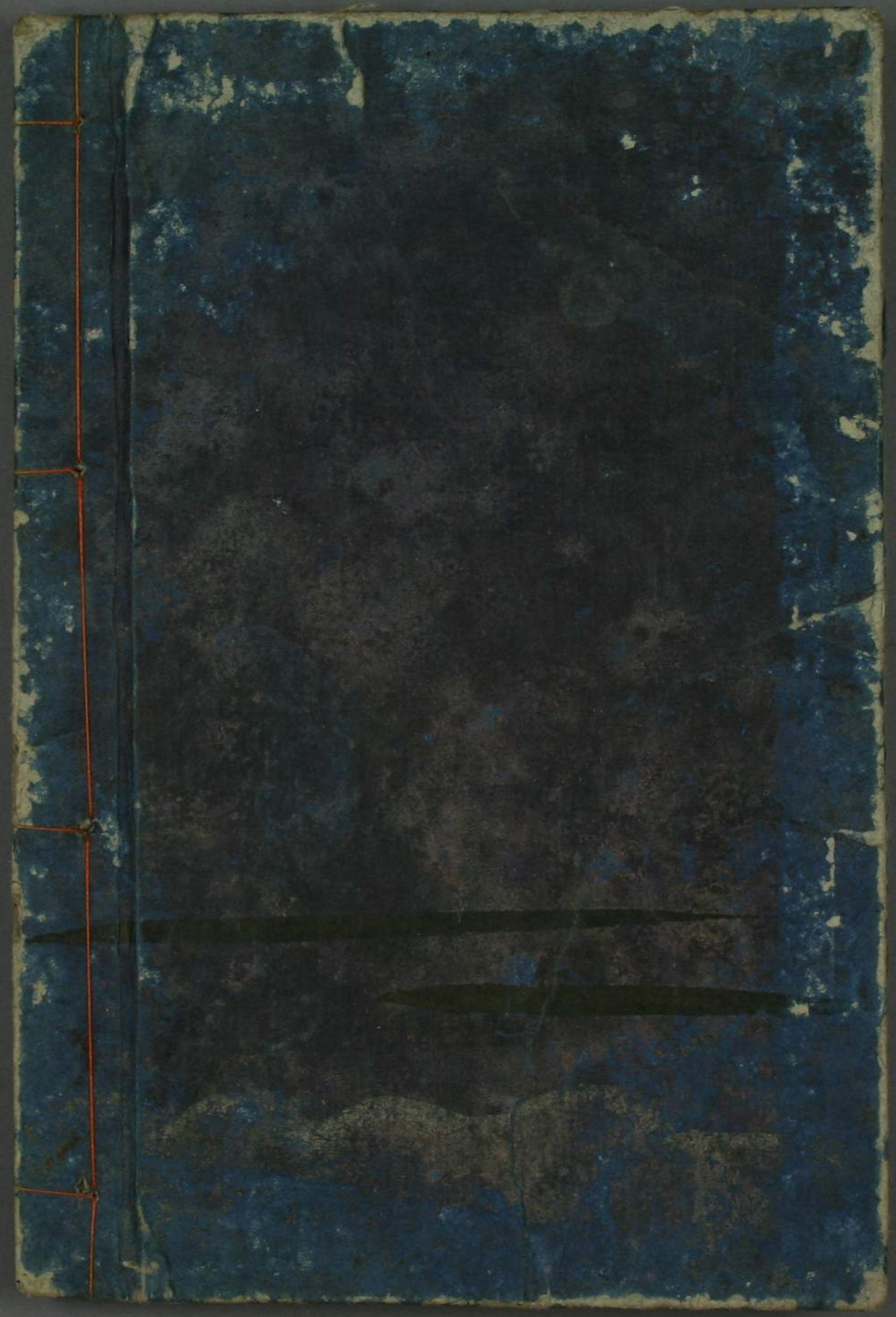
お柳さん何ぐ取よやつく。　鄰「人をまごよぐやうれくう
トいふと義次郎ハ小僧に一銭よ渡すの桜の花をの二枝葉等拾のあぐゝ踊ゝら
おぐゝぐのふるゆく鼻ぐ鼻ぐよ入るハ義をの二枝入まるを見ゝうり
ゑ　「ぐ人がお飯りぐ。さうきうら大まちうねゆ　義「と
見ハくゝ義次さん七きんよくおもぐ。お柳うんぐのつと
やぐうる世へ。あまりたうねへく看ぐ　市山「とうく人がお
笛をるぐとさみゝのようぐどぐり母と。お柳さんハ
大ぶまむ行ぐうゝ。おのくハ代ぐぐうと向のづくぐ
鄰「そようさのまゝよ　ゑ「そまハそのとお陽ぐハ大

分美しの大年増がおつまゆきねへ 番「ちつとまちねへ
の。ひんよろへ 番「ちつと空を見るがいひ。今変へ来る時
ちつとおまつさまとくらべさいま〜 柳「つまんやどま
たういらちがいつて見やう 下女「ハイくト出て 下女「ヤ お辻
どんろ何ごへ 「おつまんとんは新造さまがとふおつ
ちややつまます。親類どもも病人がございます。二三
日泊まる糸りますからお願みやすと。お仕まる糸り

まつ〜 柳「ちとまりの女中うへ。こちとちくおあがりよ
「ハイおつまごこんどぎり外 柳「時間はお前のところの
御新造さまが私の所へおいでなさるそうだ。おりが
ちろく私が菊寺でお首よりうらうえんぶ。私もおなじ
糸るのごぶどふす。菊寺居よとまりくつのく。
さぶ汰だろうで。こちとちへお上りよトおつまゆ番「こちくとろ
ちへおあがんな世へ。さるの内うらいこと年増の女
中はあまこはまんごへ 「ハイ今お糸よめ〜このぐ

どぎりまする　丑「さあのく。アノ黒い色物の前掛よ」「ハイ私どもの口もんぞさるでどぎります」　茂「且那ハあるどころうね」「ハイ上方まとぎりますが。」　丑「まつ度づくとうちへあちらまさまします」　茂「おゝひものを　きどど且那も上方であんぐらまるどころう」　柳「きろいお世話さ」　市山「その口病人とりのハ何どへ」「近所　まどあ中が見るうつさあ口見イさんの所のおむきめど　さ夏ぐ此第口病氣で。獨り娘でどぎりますすら

あ娘ど拵ぐ〜まするのさ毎日〜口みぐまりのります　から一日あ知るのさまします。多分ろう〜金拾六ケ月　そふでおぎりまするト下谷口のさぐるのさる問屋　丑「お娘子　の口病氣ハ定めし〜菊五郎の巫へてす行このとろ。團　十郎の巫へとろ。何ま表の口病氣どろう」「イまそそる　浮氣ろお方でハどぎりませんよ」　丑「そまでするむきも　の病氣ハ表ま見るどらひるものど」　柳「そのサそのお娘子ハ　おいろ信どェ」「十七どそそるでどぎりますぐまぐ澄

十五だろうのようでおぢりまする。氣はちつとまどぎまさせんよ。そして一度どこへか嫁のようなあるさうまして。先の聟さまがゝ死んゞとやらきらつくことやうで内へもつくり接ぎ〳〵このでどぎりまする。ト。腰をぬかして落つこける。

あんぽ婦女今川卷之一終